人生の分かれ道で、真に「運命」を分けるものは何か

田坂：それこそが、今回の対話における、大切な問いですね。
ただ、その問いに答えを見出したいならば、さらにもう一つ、次の問いを問うてみるべきでしょう。

人生の分かれ道で、真に「運命」を分けるものは、何か？

――：真に「運命」を分けるもの・・、それは、何でしょうか？

田坂：そのことを教えてくれる、ある象徴的なエピソードを紹介しましょう。
ある男性が、米国に出張中、自動車を運転していて酷い交通事故に巻き込まれ、大怪我を負い、運び込まれた病院で、左足を切断する結果になりました。
本人は、「一瞬の事故で、人生を棒に振ってしまった！」と悲嘆の底にありましたが、日本から駆けつけた奥さんは、病室に入るなり、何と言ったか。
その奥さんは、旦那さんを抱きしめ、こう言ったそうです。

「あなた！　良かったわね！　命は助かった！　右足は残ったじゃない！」

これは実際にあった話ですが、この話は、我々に大切なことを教えてくれます。

何が起こったか
それが、我々の人生を分けるのではない

起こったことを、どう「解釈」するか
それが、我々の人生を分ける

すなわち、人生で起こったことを「解釈」する力、「解釈力」。
それが、我々の人生の分かれ道で、真に「運命」を分けるのですね。

――：なるほど・・、人生の「解釈力」ですか・・。
このエピソードは、「コップに残った半分の水」の喩えに似ていますね。「もう半分しかない」と考えるか、「まだ半分ある」と考えるかですね？

田坂：たしかに、世の中で、そうした「コップの水」の喩えは、しばしば使われますが、このエピソードとは全く違うものです。
なぜなら、このエピソードは、文字通り、「命が懸っている場面」であり、「人生が懸っている場面」だからです。その「コップの水」の喩えとは「切実さ」が全く違うのです。
「コップの水」の場面は、人生が懸っている場面ではないため、安易に「もう半分しかない」と考えてしまうのが人情ですが、この「交通事故」の場面は、人生のぎりぎりの場面であるため、逆に、腹を定められるのですね。
安易な救いの無い場面だからこそ、腹を定められる、覚悟を定められる。
そして、腹を定め、覚悟を定めたとき、不思議なことに、我々の心の奥深くから、力が湧き上がってくるのですね。

――：先生が、そう言われるのは、先生自身が、かつて「生死の境」を体験されたからでしょうか・・？

田坂：そうですね。私自身、かつて大病を患い、医者からも見放され、もうどこにも救いの無いとき、不思議なことに、その極限の場面で、心の奥深くから力が湧きあがってきた体験があります。
人間というものは、我々が思っている以上に、「強さ」を持っているのですね。
そして、「生命力」を持っている。
ただ、人生の逆境において、まだ退路があり、逃げがあり、救いがあるかぎり、その「強さ」や「生命力」が現れてこないのも、また、一つの真実なのですが。

――：どうすれば、その「強さ」が現れてくるのでしょうか？

田坂：「生死の境」というほどの厳しい体験を乗り越える「強さ」は、それほど容易には現れてきませんが、先ほど申し上げた「逆境観」と「解釈力」を身につけておくと、それぞれの体験の厳しさに応じて、それを越える「強さ」が現れてきます。

――：「逆境観」というのは、人生において与えられる様々な逆境を、自分が成長できる素晴らしい機会であると受け止める心構えのことですね。「解釈力」とは、逆境が与えられたとき、その逆境を、肯定的に受け止め、前向きに捉え、解釈する力のことですね。

田坂：そうです。しかし、実は、逆境において、我々の中から、本当の「強さ」や「生命力」が現れてくるのは、心の中に、最も肯定的な「逆境観」や「解釈力」を掴んだときなのですね。

――：それは、どのような・・？

田坂：誤解を恐れずに、申し上げましょう。

この逆境が与えられたのは
大いなる何かが、自分を育てようとしているからだ

その感覚を心に抱き、その最も肯定的な「逆境観」や「解釈力」を掴んだとき、我々の中から、想像を超えた「強さ」と「生命力」が現れるのですね。

――：先生は、その「大いなる何か」が存在すると言われるのですか？　「神」や「仏」のようなものが存在すると言われるのですか？

田坂：いえ、「大いなる何か」が存在するか、「神」や「仏」が存在するかは、人類数千年の歴史の中で、未だ誰も、科学的には、それを証明していないのですね。

そのことは、確かな事実なのです。おそらく、これから人類の歴史が数千年続いても、科学的に証明されることはないかもしれません。

ただ、一つ言えることは、人類の歴史を振り返るならば、過酷な逆境を越えて優れた事業を成し遂げた指導者など、この「大いなる何か」が存在すると信じた人間が、想像を超える「強さ」や「生命力」を発揮した例は、枚挙にいとまがないのですね。そのこともまた、確かな事実なのです。

従って、私が、ここで、「この逆境が与えられたのは、大いなる何かが、自分を育てようとしているからだ」と思い定めることの大切さを申し上げているのは、神や仏が存在するという「宗教的信条」を述べているのではなく、あくまでも、我々の中から想像を超える「強さ」や「生命力」を引き出す「心理的技法」、すなわち、「こころの技法」として述べているのですね。

そして、私のこの立場は、この対話を通じて、一貫しています。

――：すなわち、先生は、「宗教的信条」を述べているのではなく、あくまでも「心理的技法」を述べていると言われるのですね？

田坂：そうです。従って、この後、私の話の中で、「祈り」という言葉が出てくるかと思いますが、それらも、すべて、我々の中から、「心の強さ」と「生命力」を引き出すための「心理的技法」、逆境を越える「こころの技法」として述べていると、理解して頂ければと思います。

「神や仏が、いるか、いないか」という、まさに「神学論争」をするよりも、我々にとって大切なことは、目の前の逆境を越える「心の強さ」を自身の中から引き出すことであり、病を克服する「生命力」を引き出すことであり、自身の中に眠る「素晴らしい可能性」を引き出すことなのですね。

私が、この対話を通じて読者の方々に申し上げたいことは、人類の宗教や文化、習俗や風習の歴史の中から生み出されてきた様々な「心理的技法」を、現代に適した、誰にでも使える技法として発展させ、洗練させながら、良き人生を歩むために活用していくことの、大切さなのですね。

――：分かりました。それが、先生が、「こころの技法」という言葉を使われる理由なのですね。